

吹き抜け部分に設置された足場

## 郷土資料館 休館延長のお知らせ

～令和5年7月31日



展示ケース改修作業

世田谷区立郷土資料館は、令和4年4月1日から1年間お休みをいただき、館内設備の更新工事を行ってまいりました。

令和5年4月1日のリニューアルオープンに向けて、職員一同準備に取り組んでまいりましたが、昨今の世界情勢の影響を受けて、更新設備機器の調達が大幅に遅れたため、予定通りの再開は困難な状況になりました。そのような中でも、工事関係者の皆さんの努力により、年度内には何とか竣工し、今後は8月1日のリニューアルオープンを目指して準備を進めてまいります。

開館記念として、いくつかの行事を予定しておりますので、ご期待ください。

区民の皆様には、長い間ご不便・ご迷惑をおかけしておりますが、いましばらくお待ちいただきたく、ご理解、ご協力のほどお願いいたします。

## 新収蔵資料紹介

# 戦前期の写真資料と写真館について

### 所蔵写真資料の現状

当館では、昭和20～30年代の区史編纂事業の際に撮影された、約6千点の区内風景写真を所蔵している。これらの写真は順次デジタル化し、世田谷デジタルミュージアム (<https://setagayadigitalmuseum.jp>) での公開を進めているところである。デジタルミュージアムでは、撮影された地域や被写体などをキーワードとして検索することが可能となっている。

一方、戦前期の写真については、個人宅に伝来した資料群の中に数点から数十点ずつ含まれているため、その全貌を把握することが難しい。資料館所蔵の戦前写真の体系化は、まさに作業途上にあると言って良い。

### 新収蔵の戦前期写真資料

このような中で、今年度、資料館では新たに世田谷区大蔵在住の方から、大正時代から昭和20年代の記念写真を中心とした30点余りの写真の寄贈を受けることとなった。写真の大半は、いわゆる台紙付写真と呼ばれるもので、厚さ数ミリ程度の厚紙に、印画紙に焼き付けられた写真が貼ってある【写真1】。写真の内容は、尋常小学校卒業記念の集合写真や、消防組や青年団などの写真、建物の上棟式や竣工に伴う記念写真などである。また、富士登拝や村社における祭礼など、民俗行事にかかわる写真もあり、文書資料と併せて今後分析していくことができるだろう。



写真1 台紙付写真(天祖教会落成式記念)  
天祖教会については不詳。台紙の下部には「小林写真館」のロゴマークが刻印されている。



写真2 昭和20年代の葬送  
寄贈者の曾祖父の野辺送りの写真。花輪、花籠を持った人に続き、僧侶や位牌を持つ人が続く。

この他、結婚や七五三などの際に撮影された家族の肖像写真も複数含まれていた。肖像写真の多くも、写真館で撮影されたことが明らかでない台紙付写真で、撮影時期がわかるものについては、大正～昭和10年前後である。この時期は、新聞や書籍にも写真館の宣伝広告が複数見られ、中には婚礼写真を撮影する際の並び方や、七五三写真の撮影を宣伝するものもある。まだ一般家庭に写真機が普及していなかったこの頃、人生の節目に写真館で写真を撮るということが、1 写真の一部は、同じ地域在住の方が所蔵されている資料と重なるものもある。

ある程度多くの人々に受容されていたことを窺わせる<sup>2</sup>。

## 戦前の写真館

それでは、戦前期の区内には、幾つぐらいの写真館があったのだろうか。また、どこにどのような写真館があったのだろうか。試みに、昭和7年(1932)に発行された世田谷区版(砧・千歳村域は含まれていない)の「大日本職業別明細図」に登場する写真館を洗い出してみると、表1の10軒が存在したことが判明する。一方、これとはほぼ重ならない形で、整理済みの館所蔵写真からは、表1の6軒を確認することができた<sup>3</sup>。

表1 戦前期区内の写真館

昭和7年 職業別明細図		館所蔵写真	
小林写真館	太子堂町	小林写真館	世田ヶ谷砲兵旅団前
平山写真館	三宿町	越石写真館	世田ヶ谷中原駅際
岡本写真館	玉川奥沢町一丁目	加賀谷写真場	上馬
玉川写真館	玉川町	内野写真館	世田ヶ谷町(学院前)
島田写真館	玉川用賀町二丁目	東亜写真館	三軒茶屋
野村写真館	松原町三丁目	柳屋写真館	東京玉川
不二写真館	松原町二丁目		
松竹写真	松原町一丁目		
田村写真館	野沢町一丁目		
広瀬写真館	北沢三丁目		



写真3 小林写真館  
(大日本職業別明細図より)  
小林写真館は三軒茶屋交差点のすぐ近くにあった。

館所蔵写真の中では、小林写真館(世田ヶ谷砲兵旅団前)、越石写真館(世田ヶ谷中原駅際)のものが特に多い。これは写真旧蔵者の居住地の偏りに影響される部分も大きいと思われるが、たとえば今回新たに寄贈された大蔵在住者の写真資料の中にも、小林写真館撮影のものが多く含まれていることから、この写真館の商圏の広がりや営業規模を窺わせる。また、撮影年代が明らかなものについては、小林写真館の写真は大正期に集中し、それ以降の写真では、玉川の柳屋写真館や成城学園前の安藤写真館、宇奈根の野沢写真場など、より大蔵近隣の写真館が登場するようになる。このことから、小林写真館は比較的古くから営業しており、昭和に入った頃から徐々に大蔵を含め、区内の写真館の数が増えて来たと考えられることもできるだろう。これに伴い、世田谷の人々にとっても、写真館を利用した写真撮影がより身近になっていったものと思われる。

(学芸員 角和裕子)

主要参考文献:尾崎泰弘「地域史料としての台紙付写真に関する一考察」『アーカイブズ学研究』9(2008)

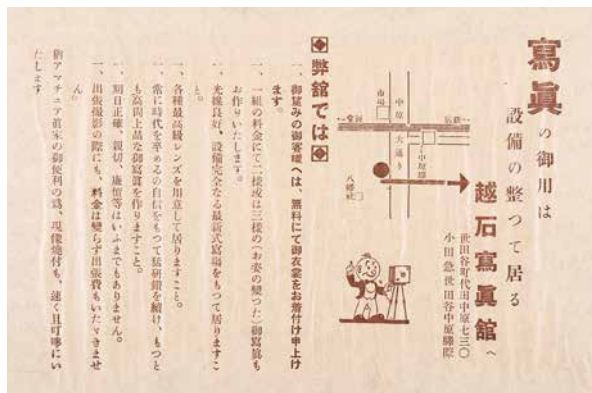


写真4 区内写真館チラシ  
所蔵資料中にも多く残る越石写真館のチラシ。  
小田急線が開通する昭和2年以降、世田谷区が成立する昭和7年以前の資料。

2 横浜では、大正12年(1923)の関東大震災以降、人生の門出に写真館で家族写真を撮ることが人々に定着したと指摘されている(「企画展 横浜の写真館の歩み」『開港のひろば』115号<2012>)。

3 所在地については、時期によって表記が変わるため、代表的なものを1つ記した。なお、写真館の数や分布を把握するためによく利用されるのが朝日新聞社編『日本写真年鑑』所収の「全国写真師名簿」だが、なぜかここには区域の写真館が一つも掲載されていない。この時期に写真館がなかったわけではないことは明白なので、掲載されていない理由は判然としない。

## 新収蔵資料紹介

# 母と魔法のミシン



写真1 足踏みミシン (シンガー社)  
ミシン：新型式 201K 型 台：普及型 404 番型



写真2 原八重子  
昭和 30 年 (1955)

### はじめに

みなさんは「足踏みミシン」【写真1】をご存じだろうか。写真を見て、ミシンが動いていた在りし日の風景と、その音を思い出しながら、懐かしんでいる読者もいることだろう。「子どもの頃に、母親がワンピースやスカート、洋服を縫ってくれた記憶がある。」と、そんな声が聞こえてきそう。今回は、そんな思い出がたくさん詰まった足踏みミシンや写真をご寄贈いただいたので、紹介したい。

まず、足踏みミシンといえば、シンガー社（アメリカ）を思い浮かべる方が多いのではないだろうか。同社は1851年、アメリカでアイザック・メリット・シンガーらによって設立された。明治33年（1900）には日本で店舗を構えて販売を始め、1910年代には日本の家庭ミシン市場の80%を占めていた。当時、シンガーミシンはとて高価な商品にも関わらず、多くの家庭が購入していた。その理由は、シンガー社が世界各国で展開してきたシンガー・システム—現地人による戸別販売システム—を採用したこと、分割払い制度を導入し、月給の低い家庭でも購入できるようにしたことなどが指摘されている。

### 田中家について

次は寄贈者の家の歴史について辿ってみよう。ミシンの使用者であった原（旧姓：田中）八重子【写真2】は、昭和5年（1930）、給田の田中松之助とキノの長女として生まれた。松之助は、本家から分家した後、米屋を開業、第二次世界大戦後には田中製粉工場を創業した。水車に代わって電気による動力を使用して製粉していたため、近隣からは「火車<sup>かしや</sup>」と呼ばれていたようだ。

### 八重子とミシン

八重子は山水高等女学校（現桐朋女子高等学校）に入学。この学校は軍人の子弟子女を教育する目的で

創設されたため、商家の娘として入学することは珍しかった。小さい頃から編み物などが好きだった八重子は、共立女子専門学校（現共立女子大学）の被服科へ進学したが、「女が大学なんかに行くものではない」と、当時は周囲から大反対を受けたようだ。

昭和 23 年（1948）、大学の授業でミシンを使うため、両親と一緒に新宿伊勢丹でシンガーミシンを購入する。戦後間もない時代に購入したことから、「外国製のシンガーミシンはかなり高価だったので、大切に使わないといけない」と、八重子はよく家族に話していたという。八重子が購入した当時の価格は不明だが、シンガーミシンが同 27 年に日本市場で発売する予想価格は 6 万円で、国産品の約 3 倍だった。同年の公立小学校教員の初任給が 5,850 円、お米 10kg が 620 円の時代だったことを考えると、いかに高級商品だったかがわかるだろう。

八重子は大学で教員免許を取得し、卒業後は母校の桐朋中学高等学校で家庭科の教師として勤務した。昭和 30 年（1955）、八重子は 25 歳で結婚した。夫の経営する富士商事はカーテン取付工事を主としていたため、注文が入ると八重子がミシンでカーテンの仕立てをしていた。その後、カーテンの需要がなくなると、手芸店に変更し、昭和 45、6 年くらいまで営んだ。



写真 3 共立女子専門学校の記念写真  
前列左から 4 番目が八重子。



写真 4 記念写真 昭和 38 年（1963）頃  
子どもの服は、八重子の手作りでお揃いの柄。

## ミシンの思い出

八重子はミシンを使って何でも作ることができたという。洋服、ワンピース、テニスのスコートとアンダースコート、ピアノの発表会のドレス、エプロン、ポーチ、手提げバッグ、カーテンなど。修学旅行前日に着る服がないという、前日の夜は布だったものが、翌日の朝までにはきちんと洋服に仕立てられていた。そんな八重子とミシンの技術をみていた娘は、「まるで魔法使いの母と、魔法のミシン」のようだったと回顧している。このシンガー社の足踏みミシンは八重子が購入してから晩年まで、約 70 年以上にわたって大事に使われ続けた。

## おわりに

今後は郷土資料館で、足踏みミシン体験など、また皆様のお役に立てるよう計画しているので、楽しみにお待ちいただきたい。

（学芸員 松浦瑛士）

主要参考文献：世田谷区区長室広報課『グラフせたがや』第 32 号・夏（1986）／世田谷区立次大夫堀公園国民家園『粉屋の記憶—水車と火車—』（2010）／アンドルー・ゴードン（大島かおり訳）『ミシンと日本の近代 消費者の創出』（2013）

## 収蔵資料紹介

# 木本大果の「茄子図」について

### はじめに

当資料館では、明治末から昭和 30 年代にかけて活躍した日本画家・丸山永畝（1886～1962）の作品や写生帖を、ご遺族やご親族からの寄託を受けて、数多く収蔵している。永畝は、長野・上諏訪生まれだが、20 歳で上京し、花鳥画の巨匠として知られた荒木寛畝（1831～1915）に師事、東京を主舞台に画家として大成した。寛畝亡き後は、その画派を継いだ荒木十畝（1872～1944）に従い、寛畝、次いで十畝が主宰した読画会で重きをなした。本郷区（現文京区東部）弓町や豊島区駒込に居住後、長野への疎開時期を経て、終戦直後のいつとき世田谷（赤堤）を仮住まいとした。程なくして狛江に移住するが、ここが終の棲家となる。なお、墓は区内北烏山の称往院にある。狛江移住後も、世田谷へは度々スケッチに訪れており、このような経歴を踏まえれば、いわば「世田谷ゆかりの」といってよい画家である。こうした事情もあり、当資料館では、永畝の作品や資料の収集につとめている。

ところで、この永畝と同門で、やはり世田谷に在住していた日本画家に木本大果（1901～2001）がいる。永畝との関わりや世田谷在住画家だったということから、大果の作品もやはり収集対象となっている。

近年、大果の作品が収蔵されたので、本稿において若干の紹介をしておきたいと思う。

### 木本大果の略歴

大果は、明治 34 年（1902）に東京・神田で生まれた。14 歳で松本楓湖（1840～1923）に師事し、早くから優れた画才を示していたという。楓湖没後は荒木十畝のもとに入門、読画会でも程なくして頭角を現した。この画派は荒木寛快（1785～1860／寛畝の師）に始まるが、寛快の師弟関係を紐解くと、師が片桐桐隠（1759～1819）であり、その師匠が渡邊玄対（1749～1822）なのである。桐隠は人物画に優れた画家であったが、同時に花鳥や山水にも長じていたという。一方の玄対は、江戸後期江戸画壇の大御所・谷文晁（1763～1840）の師としても知られる南蘋風花鳥画の名手であった。玄対も「門前市をなす」と評された当代きっての人気画家である。「南蘋風」とは、中国・清代の画家・沈南蘋（1682～?）の写実的花鳥画を真似た、或いは日本人好みにアレンジした画風を指す。読画会が花鳥画の専門流派として声望が高かったのは、こうした系脈に位置することも大きかったとみられる【図1】。それはともかく、大果はこの画派でめきめき腕を上げ、昭和 4 年（1929）の第 10 回帝展で初入選を果たし、第 15 回帝展（1934）では特選を受賞している。戦前は官展への出品、そして、戦後は日展への出品を主軸に活躍した。第 9 回日展（1952）では白寿賞を受賞している。

官展時代からその独特な作風と色彩感は大いに注目されたといい、花鳥や風景といった得意ジャンルにおいて、それは遺憾なく発揮された。ちなみに、第 15 回帝展の特選受賞作品は「秋林」（1934 作）で、現在世田谷区が所蔵している。当資料館にも大果の軸装作品が 1 点ある。梅にジョウビタキを描く伝統的構図の花鳥画である【写真5】。したがって、今回紹介する作品が、大果の収蔵品としては 2 点目になる。

十畝のもとで同門となった永畝との親しい交流というのは、今のところ知られていない。両者の住まいは近く、ともに自然をこよなく愛し、スケッチにいそしんだ点は共通するところなのだが……。大果が残した資料類に、永畝に関わる何らかの記録が見つかるか、期待したいところである。ちなみに、永畝が親しかったのは太田秋民（1884～1950）で、永畝宅へよく遊びに来ていたという。



写真1 茄子図全景

## 本作品の概要

この作品は掛幅装で絹本着色。法量が本紙部分で縦121.0cm、横36.3cmを計る【写真1】。落款印章は、「大果」の署名に朱文方印「大果」である【写真2】。箱書きもあり、蓋の表裏に自ら記した墨書がある。蓋表は「茄子」、蓋裏には「大果筆」の墨書の下に作品と同じ印が捺されている。

さて、箱書きにもあるように、見てのとおり茄子を主題とする、いたってシンプルな構成の作品である。こうした作品の場合、主題である茄子のみというよりは、鳥や昆虫、他の草花などが添えられることが多い。画面右下に描かれている赤紫色の小花を密に咲かした草花は、葉の形の特徴からイヌタデのようだが、これなどまさしくそれに該当するものである。茄子の葉や実の色彩感に対して、どうしても赤系の色を画面に加えたかったからなのであろうか。季節的には合致する選択である。しかしながら、構図的に成功していると言えるのか、個人的には微妙な印象である。茄子の品種は、葉の大きさと比べても随分と小さいことから小茄子であろう。花が下の方に付き、雌蕊（<sup>めしべ</sup>花柱）が雄蕊（<sup>かちゅう</sup>）よりも突出して描かれているが、これは健全な状態であることを示している【写真3】。確かに実も成っており、順調に生育していることがわかる。逆に、花が上方（先端部）につき、雌蕊よりも雄蕊が長いのは、栄養不良のシグナルだという。こうした細かなところにも手抜きのない正確な描写は、さすが花鳥画系流派に属した画家の面目躍如といったところである。実物をじっくり観察したうえでの描写に違いない。没骨による茄子の葉や茎の輪郭が少々滲んでいるのは、意識的なのか、<sup>もっこつ</sup>磬水引きが不十分だったのか、なんとも言えない。ただ



写真2 同 落款印章



写真3 茄子図部分



写真4 茄子図部分

し、近年の研究では、蓄水引きを施した絹本の場合、滲みが自然に現れることはほぼない、との実証結果が報告されている。葉の明暗には、滲みを活用したような、或いはたらし込みのような技法が見受けられる。他の作品でもままた確認できるもので、描法的な特徴といってもよさそうである【写真3】。これに対して、イヌタデの描き方は滲みがなく、葉の白緑色はベタ塗り風で濃淡の変化も乏しく、かなり対照的な描き方と言える【写真4】。

保存環境があまりよくなかったらしく、画面の各所にシミがあり、やや画観が損なわれているのは惜しまれる。代表作と言えるようなものではないが、大果の作画スタンスや技法の一端がうかがえる点では参考になる作品である。制作時期の特定は難しい。しかしながら、署名が丁寧で、昭和初期から10年代にかけての書体に近い印象を受ける。現状、その頃の作と考えておきたい。それにしても、どこの茄子を描いたものなのだろうか。案外自宅に植えた茄子かもしれない。

## 課題

大果に関する詳細な研究は未だなされていない。ご長命であったことから、制作された作品は相当な数にのぼると思われる。体系的、総合的な研究は当然必要だが、そのためには、ご遺族やご親族のもとに残された作品や関連資料、さらには代表作を基本に据えつつ、別途作品等の博搜が肝心な作業となる。現状、当館での作業はその作品収集に力点が置かれているわけである。こうした地道な作業の集積が、大果の作画における様々な技法や特質に関する情報を、いっそう豊かにしていくこととなる。なお、本作品に捺された印章はこれまで筆者が見たことのないもので、一応留意しておきたいと思う。

## おわりに

大果が世田谷で暮らした期間は実に70年を超える。武蔵野の自然、ひいては世田谷の風景を好んでいた証とも思われる。実際、その辺りを描いたスケッチは数多いという。当館にある永畝の膨大な写生帖も、世田谷



や狛江など自宅近辺のスケッチは多い。こうした風景を対象としたスケッチも、今となっては作品制作の参考から、一昔前の風情を知ることできる貴重な記録へとその意義を変えた。大果が残したスケッチ類も、その点で同様の価値があるといえる。彼らのような、地元との結び付きが強い画家の存在は、やはり世田谷ゆかりの一人物として紹介していく責務が、郷土の博物館にはあろう。まぎれもなく大果はその一人であり、今後も作品、資料の収集につとめたいと考えている。なお、永畝、大果と同門で世田谷在住だった日本画家は他にもいる。松久休光まつひさきゆうこう（1899～1956）である。休光の作品も、上記の理由を当てはめれば、無論収集対象となる。彼らは今日、一般にあまり知られていない。まさに、忘れられた画家たちといってよかろう。しかし、在世中は画壇で活躍し、名を成した存在であった。作品収集にとどまらず、画家としての評価も含め、見つめ直していきたいところである。作品や資料に関する情報提供にも期待したい。

（学芸研究員 鈴木泉）



写真5 木本大果作  
「梅にジョウビタキ図」

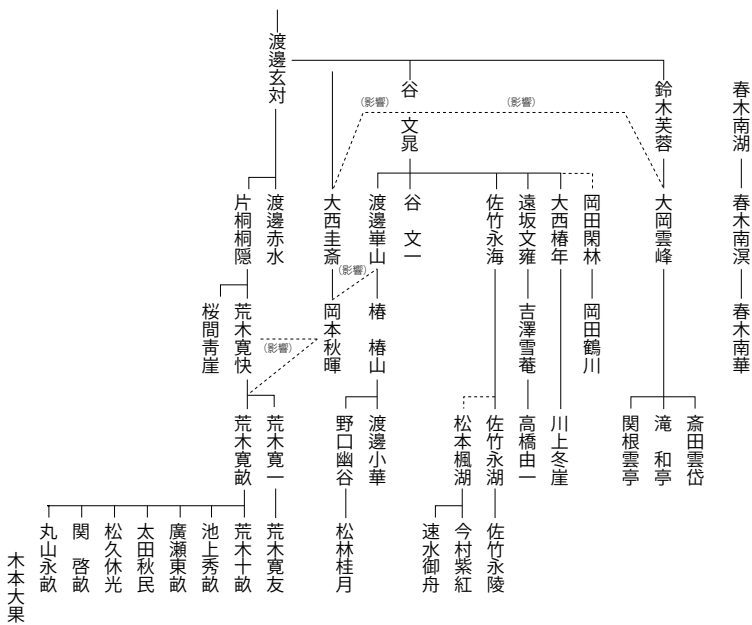


図1 荒木派及び関連画派略系図

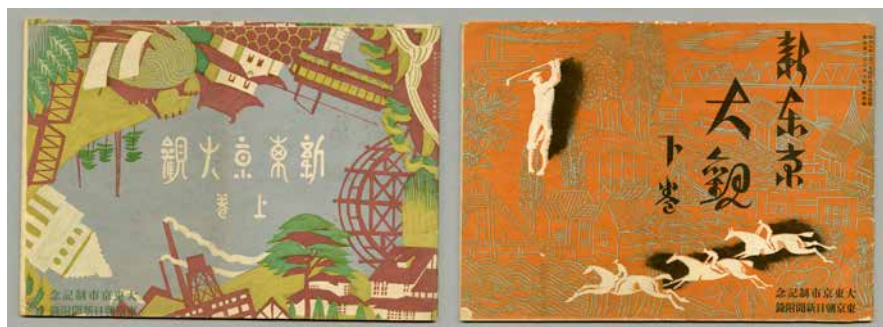
（『野の画人 丸山永畝の写生帖』より）

【主な引用・参考文献】

日立市郷土博物館『近代花鳥画考—読画会・荒木一門の系譜』（2000）／東町立歴史民俗資料館（現茨城県稲敷市）『木本大果展』（2000）／世田谷区立郷土資料館『野の画人 丸山永畝の写生帖』（2006）／『イラストでよくわかる おいしい家庭菜園』（JAグループ一般社団法人 家の光協会 2019）／林樹里「平成 30 年度助成研究「たらしこみ」と「にじみ」の実証的研究—基底材との関係—」（[https://www.housen.or.jp/common/pdf/30\\_02\\_hayashi.pdf](https://www.housen.or.jp/common/pdf/30_02_hayashi.pdf) を参照）

## 収蔵資料紹介

# 『新東京大観』が伝える昭和7年の世田谷



『新東京大観』表紙  
大東京市制記念  
東京朝日新聞附録 上・下巻

発行所 東京朝日新聞社  
発行日 昭和7年10月1日  
各巻48頁  
縦18.9cm×横26.3cm

## 大東京市の誕生

明治22年(1889)5月1日、市制町村制施行により、東京府東部の15区を市域として東京市が設置された。この時の町村合併によって、東京市に隣接する荏原郡の世田ヶ谷、駒沢、松沢、玉川4村も成立している。

昭和7年(1932)10月1日、東京市は周辺の5郡82町村を編入し、新たに世田谷、荏原、目黒など20区を設置した。旧市域の15区と新市域20区、合わせて全35区のいわゆる「大東京市」の誕生である。

この東京市域拡張を記念して、書籍、地図類、絵葉書、双六など様々な印刷物が発行されている。今回紹介する『新東京大観』もその中の一つで、市域拡張が施行された日の東京朝日新聞附録として配布されたものである。この冊子は新たに東京市となった20区を紹介しており、上巻に北東部の10区を、下巻に世田谷を含む西南部の10区を収録している。表紙画は上下巻とも和田三造による。和田は黒田清輝に師事した洋画家で「南風」がよく知られている。表紙には、それぞれの区の名所・名物が描かれているようであるが、下巻表紙の世田谷名物がお分かりになるだろうか。世田谷区のページを見てみよう。

## サラリーマンの夢そのまゝ 点在する田園住宅

世田ヶ谷町、駒沢町、松沢村、玉川村の2町2村を合併して世田谷区は誕生した。冊子には、成立時の人口は133,254人、人口密度は113人強(1万坪あたり)とあり、続けてこう記されている。

密度が少ないだけにどこかのんびりとして、まだまだ青田も見えるし、点在する田園住宅はサラリーマンの夢をそのまゝチューリップの花壇となり、赤瓦の屋根と鳥籠のある風景となって渋谷あたりとは又別なカテゴリーに於ける『楽しい我が家』の群れを形成してゐるのだ。

大正から昭和初期にかけて、京王線、小田急線、大井町線が開通し、沿線に新たな住宅地が開発されていった。大正12年(1923)の関東大震災後は都市部から郊外への移住者も多く、世田谷区域の人口は急速に増加していたが、それでもまだ大部分は、のどかな田園地帯であった。冊子には、この年の5月に入居が始まった、同潤会駒沢分譲住宅の航空写真が掲載されている。その写真にも写る駒沢給水塔を新しい名所、新町住宅地の桜トンネルを将来を約束された名所とし、多摩川河原の鮎釣りや散策は玉川遊園地と共にあまりに有名であると記している。そして世田谷区一番の名物として紹介されているのは……

世田谷区の名物はまづ第一に駒沢のゴルフリンクである。

十三万坪の坦々たる芝生の上にはいつも真黒に日焼けした健康そうなゴルファー連がクラブを振まはしてゐる。

駒沢ゴルフコースは、大正2年(1913)に東京ゴルフ倶楽部によって開場された、日本人の手による初のゴルフ場であった。この年(昭和7年)の5月、東京ゴルフ倶楽部の埼玉県朝霞移転にともない、目黒蒲田電鉄が経営を引き継ぎ、パブリックコースとして開放されていた。

特権階級からサラリーマンの手に引き渡されたグリーンはロールス・ロイスやリンカーンの高級車を集めるかはりにフォードやシボレーの円タクで賑わひ、一日に八十人内外の熱心なスポーツマンがバッグを担いで馳せ参じるようになったものだが、土地の繁栄のためには却ってこの方が有り難いに違ひない。

会員制のゴルフコースが一般に開放されたことが、高級車とタクシーの対比で描かれていて面白い。紹介文は続けて、駒場町や碑衾町の学校に通っている少年達がキャディーを勤めていることを記している。

駒沢ゴルフコースは、昭和15年(1940)の東京オリンピックのメイン会場予定地となるが、戦争により大会は返上されている。この幻のオリンピックのポスターを前述の和田三造が描いている。ゴルフ場敷地は、昭和18年に東京都によって防空緑地として買収され、戦中戦後は農耕地として貸付けられていた。その後、総合運動場として整備され、昭和39年(1964)に東京オリンピックの第2会場「駒沢オリンピック公園」として竣工している。

『新東京大観』には、もう一つゴルフ場が紹介されている。目黒蒲田電鉄が昭和6年に開場した玉川ゴルフコース(翌年に等々力ゴルフコースと改名)で、野毛大塚古墳の周りにコースと練習場が配置されていた。昭和14年に内務省防空研究所の用地となり閉鎖された。等々力溪谷のゴルフ橋はその名残である。

### よはひ 齢八十三歳の新市民

もう一つの名物とされているのは、東京府立松沢病院と、その主、葦原將軍である。葦原將軍こと葦原金次郎は、明治から昭和にかけての56年間、東京府癲狂院てんきやうとその後身である巢鴨病院、松沢病院に入院していた名物患者だった。天皇や將軍を名乗り、誇大妄想による破天荒な言動がメディアを賑わし大衆に愛された。

本冊子の中村一朗による一コマ漫画の中で、彼は世田谷区長となっている。葦原將軍はこの時83歳、大東京のもっとも有名な新市民だったのかもしれない。松沢病院の敷地にある、大正期に作業療法によって造られた庭園内の池は、將軍池と名付けられている。昭和12年、葦原は88才で没している。巢鴨病院時代より葦原將軍と接していた齋藤茂吉は、彼の死を悼んで歌を詠んでいる。その一つを紹介したい。

われ医となりて親しみたりし葦原も身まかりぬればあはれひそけし 歌集「寒雲」より

### 千歳村・砧村編入

昭和11年(1936)10月1日、北多摩郡の千歳・砧両村が世田谷区に編入されて現在の区と同じ形となった。そして、これにより世田谷区にひとつゴルフ場が増えている。昭和8年に開場した砧ゴルフ倶楽部である。

駒沢、等々力、砧、戦前の世田谷には3つのゴルフ場が存在していた。



同潤会駒沢分譲住宅地



駒沢ゴルフコース



等々力ゴルフコース



ワシの抱負 中村一朗画

(歴史専門調査員 上原智)

主要参考文献：『全国ゴルフ場案内』(日本ゴルフドム社、1937) / 『第十二回オリンピック東京大会東京市報告書』(東京市、1939) / 『東京急行電鉄50年史』(東京急行電鉄、1973) / 三橋一也『駒沢オリンピック公園』(東京公園協会、1981)

# 灯台下明るくなった世田谷

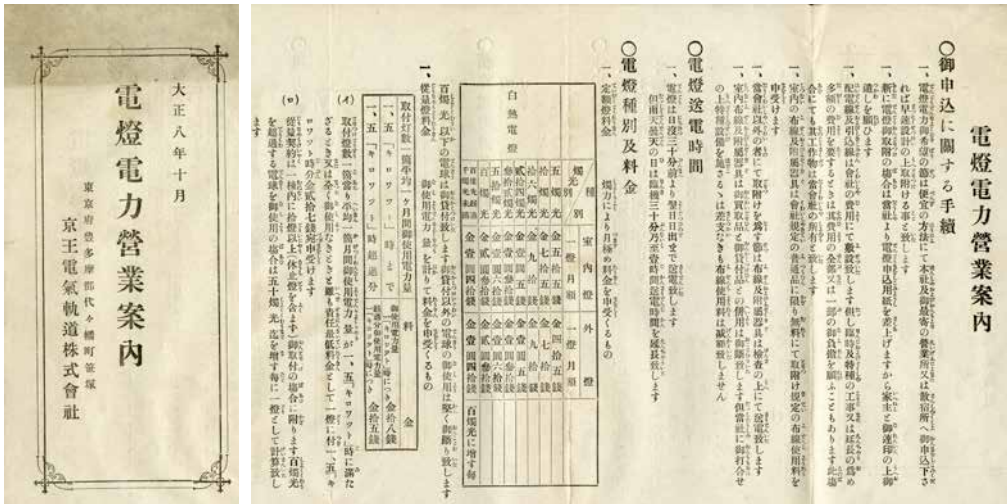


写真1 電燈電力営業案内(部分) 大正8年10月

明治40年(1907)、東京青山から千歳村粕谷の地に移り住んだ徳富蘆花(1868-1927)が、その著書『みづのたはこと』の中で、「(前略) <sup>とうだいのとも</sup>灯臺下暗かった粕谷にも、昨秋(大正11年)から <sup>でんとう</sup>兎に角電燈が つきました。(後略)」(ルビ・カッコ内は筆者による)と村の様子を描いている。千歳村は、世田谷の北西部に位置し、村を東西に横切るように京王電気軌道(以下、京王電軌)が走っている。沿線の住民は、同社によって電気の供給を受けていた。本稿では、世田谷における同社の電灯供給事業に着目し、その詳細を見ていこうと思う。

## 京王電軌の電灯電力供給事業

京王電軌が電車の営業を開始したのが、大正2年(1913)4月15日の笹塚-調布間(12.2km)で、電灯電力の供給事業は、それよりも4か月早い同年1月1日からである。当初は調布町(現調布市)と多磨村・府中町・西府村(現府中市)の4ヵ町村、612戸・1,387灯を対象に、府中火力発電所で発電した電気を供給した。

世田谷への供給は、大正5年(1916)7月に千歳村と松沢村で、同7年8月に砧村で開始されている(世田ヶ谷村への供給は、東京電灯株式会社と電灯供給区域の交換契約を結んだ大正6年頃と思われる)。そして、大正14年(1925)、同社は30ヵ町村に約8万灯の電灯を供給するまでになった。

ちなみに、大正14年には松沢村6,331灯、千歳村2,594灯、世田ヶ谷町5,326灯、砧村2,001灯の計16,252灯と、京王電軌の電灯供給量の約2割が世田谷の町村へ供給されていた。

## 電燈電力営業案内

上の資料【写真1】は、大正8年(1919)10月に出された京王電軌の「電燈電力営業案内」である。その内容は、電灯電力の申込み手続きをはじめ、契約に関する様々な取り決めが記されている。

資料の中で現在のシステムと異なり特に目を引くのが、電灯の送電時間が「日没30分前より翌日日出まで」という夜間のみ送電という点である(雨天曇天の日は30分から1時間送電時間を延長)。今と違って、昼間は電灯会社の方で変電所のスイッチを切って消灯したというのであるから驚きである。

電灯契約には定額契約と従量契約<sup>じゅうりょう</sup>の2種類がある。従量契約は「メートル」という積算電力計を取り付け使用電力量に応じた料金を支払うもので、現在の制度と同じであるが、これは1棟に10灯以上を取り付ける比較的裕福な家が契約し、ほとんどの家は1～3灯の定額契約だったようだ。定額契約は、白熱電灯の光度ごとに決まった月額を使用灯数(契約口数)分支払う方法である。例えば、室内灯<sup>しやうとう</sup>5燭光1灯なら1ヶ月55銭、10燭光1灯なら75銭というように、燭力が上がるほど月額が上がる仕組みとなっている。「燭光<sup>しよくわう</sup>」という単位がわかりにくいので調べてみると、行灯<sup>あんどん</sup>の明るさが0.2～0.5燭光、電灯が点く前まで使われていた石油ランプ【写真2】が3.2燭光だという。5燭光1灯でもそれまでよりは大明るくなったのと、ランプ生活から解放された喜びもあり、人々は大勢集まって電灯を眺めながら一晩中飲めや唄えの大騒ぎをしたらしい。



写真2 石油ランプ  
径9×高30cm  
炎を覆うガラスのホヤは煤が付くため、これを掃除するのは子どもの役割だった。

なお、定額契約の場合、100燭光以下の白熱電灯は京王電軌が1ヶ月1個5銭で貸し付け、その電灯が取り付け後自然断線や光力が低下した場合は無償で交換すること、従量契約の場合電灯は買い取りであること、「メートル」は10灯以上の契約で1ヵ月75銭で貸し付けること、その他割引制度や休止・廃止手数料及び工事費など、事細かに案内が記されている。この当時、京王電軌には13ヵ所の出張所(散宿所)があり【写真3】、人々は破損電灯の交換や電灯の申込みに訪れた。残念ながら、世田谷には出張所がなかったようで、世田谷の住民は調布か上高井戸あたりへ出向いたのだろうか。

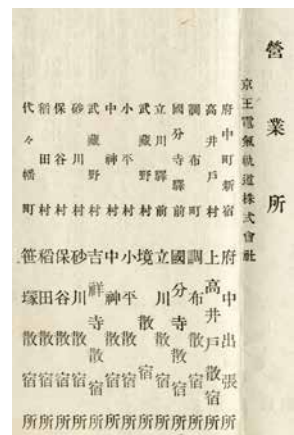


写真3 電燈電力営業案内(部分)

### 粕谷に電灯がともった

さて、冒頭で「粕谷にも大正11年に電灯がつけました」という蘆花の記述を引用したが、前述したように、千歳村の電灯供給開始は大正5年7月となっている。千歳村は、明治22年(1889)に烏山・八幡山・粕谷・廻沢・船橋・上祖師谷・下祖師谷・給田の8ヵ村が合併して成立した村であり、電灯の供給も全村一斉ということではなく、徐々に進んで行ったと考えられる。実際、千歳村は大正7年と9年の二度に亘って調布町(7年のみ)・神代村・狛江村・砧村と共同で「電灯点火架設促進願」を作成している。北を走る京王電軌と南を走る玉川電気鉄道(明治41年・1908、電灯電力事業を開始)に挟まれた地域は、

ちょうどその間<sup>はざま</sup>で電灯点火の恩恵を受けられずにいたのであった。交渉の甲斐あってか、大正11年、粕谷への電灯供給が始まった。

スイッチ一つで昼夜を問わずいつでも明るい電灯が点けられる現代において、蘆花の生きた100年前に思いを馳せつつ、電気を大切に使いたいものである。

(歴史専門調査員 小林信夫)

1 かつて使われていた光度の単位でキャンドルともいい、蠟燭1本分の光度に由来するという。

2 大正13年(1924)には電球1個48銭3厘。同時期の鰻重1つ50銭と比較すると意外に高価なものだったことがわかる。

主要参考文献：『京王電車回顧十五年』(田鍋一二事務所、1916)／『京王帝都電鉄30年史』(京王帝都電鉄株式会社総務部、1978)／加島篤「日本における定額電灯制と電球貸付の変遷」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第46号2013-01所収、<http://library.kct.ac.jp/report/kenkyu46gou.html> 参照)／『新狛江市史 資料編 近現代3』『同 通史編』(狛江市、2018・2021)／森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』(展望社、2008)

# 令和4年度 学校連携事業報告

## 社会科見学

改修工事のため、今年度の見学場所は代官屋敷のみとなりました。コロナ禍でもあり、一度の最大受け入れ数は2クラスまでを予定していましたが、一学年3クラス以上の学校も多く、3クラスの場合は主屋座敷で動画「昔の暮らし」を上映し【写真1】、4クラス以上は見学時間を分けるなどの対応となりました。見学数は計12校で、コロナ以前に比べると3分の1程度となりました。見学数を元に戻せるよう、今後も『世田谷の郷土学習』学習支援ガイドを小学校に送付するなど情報発信を継続します。



写真1 主屋座敷での動画上映

## 出張授業

出張授業を開始して3年目を迎えました。今年度は計10校の申込みがあり、世田谷区の移り変わり、学校周辺地域の歴史、昔の農家、ボロ市の歴史などについて授業を行いました。

当館が行う授業は、主に昭和30年代までの画像を使った解説になります。しかし、昔の道具を体験したいという声も複数あったことから、今年度より希望に応じ、民家園係と共同で体験型出張授業も行うこととしました。授業時間は解説・体験合わせ2コマで、内容は学校と相談のうえ決定します。今年度の体験希望は3校あり、こえおけ肥桶担ぎ、み箕やとうみ唐箕による麦の選別【写真2】を行いました。



写真2 箕での選別体験（給田小学校）

箕は穀物の選別・運搬などに使用する農具で、両手で箕の縁を持ち、軽くあおると比重の重い麦が手前に残り、もみがら籾殻は箕の先の方へふるい分けられます。やってみると中々難しく、大きな声援を送るクラスの子どもたちとは対照的に、体験する児童は中身を落とさないよう集中して黙々と取り組んでいました。

## 出張授業のポイント

先述の通り、出張授業では昔の写真を使って世田谷の移り変わり、学校周辺地域の歴史を説明します。この際、多く使用するのが航空写真です。

現在、世田谷区の人口は90万人を超えます。しかし、大正9年(1920)当時の人口は39,740人で、区内公立小学校に通う児童数と大きな差はありません(令和4年5月1日現在38,585人)。世田谷は昭和の初め頃まで農村の姿を色濃く残しており、土地の多くが農地となっていました。このことを人口・農地面積といった数字だけでなく、視覚からも確認できるよう、現在と昔(主に昭和10～30年代)の航空写真の比較を取り入れています。

例えば桜丘・上用賀・用賀は、現在、砧公園・馬事公苑といった大型公園が周囲に位置する住宅地となっています【写真3】。しかし、桜丘はかつて世田谷村の一部で、大正の初め頃まで住む人も少なく、畑や竹林が広がる農村地帯でした。また、上用賀・用賀の場合、大山街道沿いに家や店はありましたが、その他は田と畑が大部分を占めていました。昭和20年代に入っても大きな変化はなかったようで、同22年の航空写真を見

1 『せたがや百年史 上巻』(世田谷区、1992)



写真3 令和3年 桜丘～用賀周辺の航空写真  
(一部加筆)



写真4 昭和22年 桜丘～用賀周辺の航空写真(部分)  
国土地理院(<https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>)提供

ると【写真4】、住居は現・世田谷通り沿いと用賀駅(東急玉川線)周辺にあります。他は畑だということが分かります。馬事公苑(昭和15年開苑)と東京農業大学(同21年移転)は確認できますが、用賀小学校(同31年開校)や用賀中学校(同34年開校)、砧公園(同32年開園)、世田谷清掃工場(同44年竣工)はまだありません。世田谷通りは昭和39年(1964)の東京オリンピック開催に伴って整備されましたが、この頃には宅地化がかなり進み、同42年の区内地目別土地面積は宅地74.5%、農地19%となりました<sup>2</sup>。

また、航空写真を比較するなかで、河川の変化についても取り上げます。上用賀・用賀地域は昭和9年(1934)～19年に耕地整理が実施され、地域を流れる谷沢川も整備されました。整備前の谷沢川からは複数の水路が引かれており、周囲には水田が広がっていました【図1】。一方、整備後は水流が1本となり、現在では田中橋を境に用賀4丁目付近から上用賀までの上流部は暗渠化され、かつての田園風景は見る影もありません【写真5】。しかし、この谷沢川のように、川は田畑で作物を育てるのに不可欠なもので、農村地帯であった世田谷には、今では目にするのでできない川や用水路が広がっていました。こういった地域の歴史・文化を知り、理解を深めていけるよう、子どもたちが目にしたことのある素材—緑道(暗渠化した川)、橋、古い地名を残したバス停、庚申塔など—を手掛かりに、地図や写真を使って授業を組み立てるようにしています。

(学芸研究員 松本知佳)



図1 世田谷古地図 昭和4年当時  
(部分、一部加筆)<sup>3</sup>

耕地整理前、谷沢川は現・用賀小学校付近まで流れていた。図中緑色部分は水田。



写真5 現在の田中橋  
橋を境に手前が開渠、奥が暗渠となる。

2 『区制85周年記念 世田谷 往古来今』(世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん、2018)

3 世田谷区都市整備部地域整備課都市デザイン、2007

## 令和4年度 主要事業報告

### 野外歴史教室

コース名	実施日	講師	参加人数
旧馬引沢地域の文化財を巡る	4月28日(木)	松浦瑛士(当館学芸員)	24人
吉良氏ゆかりの地めぐり —駒沢公園通り沿いの旧蹟—	5月18日(水)	鈴木 泉(当館学芸研究員)	23人
桜上水の史跡と北沢川緑道を歩く	5月26日(木)	角和裕子(当館学芸員)	21人



旧馬引沢地域の文化財を巡る



吉良氏ゆかりの地めぐり



桜上水の史跡と北沢川緑道を歩く

### 《新収集資料》

#### ○寄贈資料

惣若者儀定連判帳ほか146点、石造物(庚申塔2基、供養塔1基)、東京オリンピック2020ピンバッジほか4点、桶屋道具鋸ほか177点、農業関係アルバム19点、新興大東京市制全図ほか9点、昭和時代の地域写真ほか7件

#### ○購入品

家紋蒔絵鏡立、東京都区分詳細図 世田谷区(昭和33年)、富士・三保・清見寺図(三幅対)(狩野

探信筆・江戸時代後期)、コンサイス東京都35区分地図帖 戦災焼失区域表示(昭和21年)

#### 資料館だより

No.76

発行年月日

令和5年3月28日

編集発行

世田谷区立郷土資料館

〒154-0017

世田谷区世田谷1-29-18

☎ 03-3429-4237

FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No.2151